

日華翻訳の授業における基礎理論及び方法と実践

市川春樹

東吳大學日本語文學系兼任助理教授

摘要

俗言「翻譯」不可成單門學問，故「翻譯」是集合學科，且非單獨存在，眾多學科齊聚一堂而成之學際學問。

現今臺灣的日語相關學系，學以致用風氣日盛，翻譯仍被視為實務科目，然而倘若維持依舊的翻譯課程，僅一直翻譯原文，即毫無改進，終究會走向失利。因此，筆者將此視為論點，探討翻譯課程的基本理論、方法與實踐，並深感需確立翻譯科目之授課方法。

如今技術進步頗有滄海桑田之慨，人工智慧日新月異，使得我們在討論翻譯科目時，也必須將之納入考慮。由於翻譯器的存在，我們必須思考如何在翻譯界中生存，否則，翻譯科目將會被貼上無用的標籤。

翻譯科目所教授的，應當是人工智慧無法做到的翻譯，例如解釋人的情感及其轉換等非語言領域，或者是隨筆、小說、詩文等具有文學性的文稿，此等是難以人工智慧所翻譯的。換言之，翻譯科目的重心應該轉移至人類的創造力和理解力之發揮。為做到精確且具有文學性的翻譯，就必須自翻譯理論起步，再理解語法，進而理解日華語結構及表達方法的差異，如此則可確保翻譯的精確性。

以下為本文所歸納的翻譯課程挑戰：

語言差異：首先在高等教育中，應將翻譯科應視為一門學科，並將方法論納入其中。譬如翻譯及復譯，這些學習方法可以幫助我們理解原始語言及目標語言的結構差異。為達到翻譯的適當性，必須具備原始語言和目標語言的語言智識，也就是其文法結構。另外，在詞彙方面則需要注意同音異義詞和俗語。

文化差異：翻譯不僅僅是語言之間的轉換，還牽涉文化和情感的翻譯。而翻譯的樂趣在於，如何傳達直譯中難以表達的語感。文化深入於語言與引述歷史的表現。若直接翻譯，則可能導致語句不通順，而意譯卻往往無法傳達原有的語感。若欲達到精確且優美的翻譯，對作品的理解與共鳴至關重要，因此，對作品表示敬意與興趣是必要的。

無論人工智慧如何進化，翻譯者仍然是異文化與異語言之間的橋樑，傳遞訊息的重要存在，其功能不會改變。筆者相信，如有紮實的理論基礎，並以正確的方法磨練翻譯技巧，就能培養出彌補人工智慧闕虧之翻譯人才。

關鍵詞：日華翻譯、翻譯理論、人工智慧

Fundamental Theories, Methods, and Practices in Japanese-Mandarin Translation Courses

Ichikawa Haruki

Adjunct Assistant Professor, Department of Japanese Language and Culture,
Soochow University

Abstract

Translation is a complex and challenging task that demands a good comprehension of both the source and target languages. It involves more than conversion of words from one language to another, it requires conveying the meaning, intent, and nuances of the original language.

Translation is also a creative process that requires translators to use their knowledge and skills in order to generate a text that is both accurate and readable. This can be a challenging task, as there is often no single, perfect translation that can capture all the nuances of the original text.

In recent years, the development of artificial intelligence (AI) has brought about improvement in translation technology. However, AI translation remains imperfect, and often unable to capture the nuances of human language.

Consequently, human translators retain a crucial role in the translation industry. They will be responsible for translating complex and challenging texts that demand human understanding and creativity.

The following are some of the key challenges of translation:

- Language differences: Differences in vocabulary, grammar, and syntax among languages pose challenges for accurate and fluent text translation.
- Cultural differences: Culture is a crucial role in translation. Cultural references and idioms can be difficult to translate into another language, as they may not have a direct equivalent.
- Nuances: Even within a single language, there can be many nuances of meaning that can be challenging to capture in translation. These nuances can be conveyed through word choice, tone, and context.

Despite these challenges, translation is a valuable skill that can be used to communicate with people from diverse cultures and backgrounds. Understanding the key challenges of translation is integral to becoming a more effective translator.

Keywords: Japanese-Mandarin Translation, Translational Theory, Artificial intelligence

序論

翻訳を教えるということ

筆者がまだ韓国の大学院に在学していた時分、翻訳は研究として成立しにくい故、学位論文の主題とするのは避けた方が無難だと、勉強会の席上指導教授の助言を忝くしたことがある。当時筆者は翻訳を主題とする考えは毫もなく、深くは気にも留めなかった。しかし、筆者が2020年から東吳大學に於て「日中翻譯實務」の課程を担当するに至り、辛うじてこれが脳裡を過った次第である。

なぜ研究に成り辛いかと言えば、翻訳自体は非常に古くより行われているにも関わらず、翻訳が学問として研究されるようになったのは比較的に新しく、更に、翻訳学・翻譯論は、様々な領域が輻輳的に蝟集する、謂わば学際的な研究領域なる為である。従って、これを教える、或いは学ばせる為の方法論は、非常に掴み所のない鶴の如きもので、翻訳独自の教学理論・教授法がいまだに確立されず、言ってみれば、“見て盗む現物合せ的な職人技”を教師と学生とで教場でやるような体で、体系的な教授、翻訳教授の規格化を図らねばと痛感せざるを得ない。

さて、少子化が尖鋭化する昨今、日本語関連学科の潮流として即学即用の気風愈々強く、歴史地理・古典文学・名著・小説・伝承文学講読・情報処理(日本語)といった“不要不急”の烙印を捺された科目が縮小、或いは旧弊扱いされ芟除の憂目を見る有様である。時に、翻訳関連の授業は、何とか「実学」の御墨付を賜り、暫くは安泰の模様であるが、前述したが如く翻訳は様々な領域の集合体であり、単独では存在し得ない。日本語文法・日本事情・日本語会話・作文・読解といった日本語関連学科の精華のような科目は言うに及ばず、“不要不急”科目も含めた総合的智識が試される。従って、これ等科目の刪減は、取りも直さず、翻訳という科目へも直接影響する。つまり、裸玉で将棋を指すかのような、もしくは孤立無援の宛ら航空支援のない軍艦のような目も当てられぬ状況にともすればなりかねないわけである。かような状況下では、只管に原文翻訳を課する旧態依然の徒弟制度的な方法は早晚立ち行かなくなることが予想される。筆者の問題意識とし

ては、翻訳授業の方法論を確立しなければ、同課も遠からず“不要不急”科目のレッテルが貼られてしまうのではとの危惧が根柢にある。

AIの飛躍と翻訳のこれから

今一つの不確定要素としては、人工知能(AI)の飛躍的進歩が挙げられる。周知の如く、2023年末現在、生成言語AIは、簡明且つ要を得た事務であれば十分に熟せる程の実力を持つに至っている。筆者が「日中翻譯實務」を初めて担当したのが2020年であり、正に生成言語AIが世を鬧然とさせ出した時期であった。規則に従って訳出するルールベース(rule based, 筋書型の)機械翻訳(RBMT)自体は、インターネット黎明期から存在していたが、話題にも上らぬ日陰者であった。文法的・語彙的・文化的に懸隔する言語同士の翻訳は実用水準に達していなかったからである。一方で、英語⇔独語、日本語⇔韓国語のように文法的・語彙的・文化的共通点が多い言語同士の場合は、概ね意思疎通が可能なレベルであった。

現今、翻訳科目を云々するに当り、AIの存在を抜きにしては議論が成立しまい。実際の所、学生等は既にChatGPT(旧:GPT-3), Bard(旧:Meena→LaMDA)といった生成言語AI、Deepl, Papago, iTranslateのようなニューラルネットワーク(neural network, 擬似神経網)を搭載した翻訳機に慣れ親しみ、教師側もこれらの翻訳機の使用を前提に、吾人が如何に翻訳業界で生存して行くかという命題を考える必要がある¹。AIは、膨大な文字情報を学習して、特に文脈やコロケーション(collocation, 連語)を把握する能力に優れ、目下、業務文書次元であれば、既に人類と遜色ない水準にまで達している。専門用語の類も、検索エンジンと連動するAIであれば、一般の翻訳者がやれる水準の翻訳は可能である。かくして、業務に用いる専門的な日本語は、該分野の従事者にして日本語に或程度通じる者がAIを使用しながら翻訳を行うモードが既に出来つつある。無論、一般次元の翻訳は言うに及ばない。

かくした現今の情勢に鑑みるに、実利的な語学学習—詰り業務遂行の為の語学学習と

¹ AIと翻訳を関連付けた研究は、2018年以降に急増する。研究の潮流としては、浅野享三(2018)・木村佐千子(2023)の様にAI時代の外国語教育を模索する者、전혜진(2019)・陳欣怡(2022)の様にAIの翻訳文に注目す

る者に分けられる。翻訳・通訳への影響を考える場合は、両方に注意が必要である。

いうものは今後衰頹こそすれ、二度と往時の
興隆を見ることは無かろうと思われる。

米国の文化人類学者の E.T. Hall は、著書
『かくれた次元』に於て「異なる文化に属す
る人々は、違う言語をしゃべるだけではない
。おそらくもっと重要なことは、違う感覚世
界に住んでいる点だ」との箴言を残している
。異文化コミュニケーション論の領域に良
く引かれるが、この“異なる文化”を学習し
て違う“感覚世界”に触れる捷径となるのは、恐
らく“異なる文化”にて使用される言語の学
習であろう。更に、米国の言語学者
Sapir&Whorf は、「言語は思考を左右し得る」
との有名な仮説―言語相対論を発表してい
る。言語や文化が常に意思疎通の道具の範疇
に止らず、これが精神世界の形成に影響し
ている事を示唆しているわけである。

故に、文化理解の為の言語学習と言語を通
じた表象の発露たる文学作品の翻訳とは、如
何に AI が発達すると吾人が人類として虧
くべからざる文化活動の一つとして残り続
けると考えられる。従って、最後まで残るの
は、人類の感性に係る翻訳・通訳、文化理解
の為の語学学習ということになる。

こうした状況の中では、従来のように一般
翻訳の訓練をしては、“英雄無用武之地”
ということに成りかねない。さはさりして、
問題は翻訳関連科目で何を教えるかだが、ず
ばり「AI にはまだ不可能な翻訳」である。例
えば、筆者が思い付くだけでも、漫画・アニ
メーション・映画・ドラマ・小説・随筆・
詩集といった文学性が高い領域は、AI が未
だ人類に太刀打ち出来ない。縦んば翻訳出来
たとて、到底そのまま鉛槧に付せられる品質
ではない。これは勿論、文化や情緒の解釈が
言語に宿るからに他ならず、かかる事は AI
が苦手とする領域である。非常に有名な例に
、文豪夏目漱石が英文の授業中に“I love you.”
を邦訳せよと学生に命じた所、学生等は均し
く直訳調の「我、汝を愛す」系の訳出をし、
漱石はそれに対し、我国人は斯様に直截的に
感情を表現せざるべしと窘め「月が綺麗です
ね」という訳を提示した。これは、言語の翻
訳としては零点といって良い。全く文や語の
意味が訳出されていない。では、なぜこれが
翻訳論で枕詞の様に取り沙汰される程有名
な例になり得たかと言えば、翻訳が常に言語

の翻訳に留まらず、感情の解釈や翻案といっ
た非言語的な範囲に及ぶことを如実に知ら
しめる例だからである。異文化コミュニケー
ションに於ても、言語や文化的の違いが感情
の表現に如何に影響するかを示す、好例とし
て頻繁に引用される。

この文句は、月の美しさへの賞賛の気持ち
を捉えながら、より深く、言葉にされない感
情を伝えている。実に日本人の文化や感覚を
踏まえた、非常に巧みな訳ではないか。「月
が綺麗ですね」という至極典型的な会話表現
の中に、月を見ながら、相手と共感しようと
する気持ちや、相手を大切に思う気持ちを表
現し、また、邦人の内気な性格や、感情表現
への繊細な配慮も反映しているのである。

更に、時代は大分下るが、映画“Mission:
Impossible 2”劇中、登場人物の Swanbeck の
Ethan に対しての台詞“I'm sorry and you're
sorry”を字幕翻訳者の戸田奈津子氏が「世
の中ままならない」と訳して賛否両論あった。
批判的な意見としては、やはり原文の意味と
喰い違ふとの観点から、賛同する意見として
は、主にすんなりと入って来る、日本語とし
てシックリ来るというものだった。前者は英
語の語感を伝えることに主眼が置かれ、後者
は日本人が共感出来る表現であるかを重視
しているように思う。只現実を受け入れるし
かない時、日本人はどういう感情を持つか。
人生の無常を感じ嘆くのである。これが余り
にも抹香臭いとされ、米国文化に造詣が深い
方々には嫌われるようなのだ²。個人的には、
日本人の文化や感性にも配慮した名訳だと思
うが。

可不可、適不適、共感非共感…、真意が伝
わる伝わらないの白黒二元論ではなく、恰も
階調の如くに層を成しているのが、翻訳に対
する美的感覚即ち美醜である。美醜と言え
ば、主に芸術における美的な感性的認識や、
芸術の批評に聞かれる表現である。文学も同
様で、三島由紀夫は、石原慎太郎の『星と舵』
対して、以下の様な批評を行っている。

<前略>かくて石原氏が愛するものは自己
の投影としての宇宙であり、この作品は日
本浪漫派の衰退ののち、二十年後にあらわ
れた真にロマン主義的な作品なのだ。

2 鍋倉(1997)に依れば、均衡型二言語併用者(米語と日語を母語とする)を対象に投影法による米語・日語夫々の使用時での心理構造調査に於て、日語使用時により強く、自罰的・無罰自己防禦型の反応が出た事が指摘されてい

る。この無罰自己防禦型というのは、“lo que será, será”, 「ええいままよ」と云った運否天賦で諦める心理状態を指している。

逆に云えば、『星と舵』を構成する各部分
は、この主題に忠実であればあるほど美しく、
不忠実であればあるほど醜い。³

私は今まで故意に、『星と舵』の大きな部分を占める『女』について触れずに来たが、それを語るには、どうしてもこの主題を前提にしなければならないからである。

結論から先に云うと、この作品では、他の近作に比して、氏の登場させる女がさほど作品の瑕瑾になっていない。〈後略〉

石原慎太郎文庫第八巻『星と舵』解説

通常の芸術・文学であれば、主題に忠実であるのを是とし、不忠実であるのを非とするのがセオリー(theory, 定石・理論)であろう。しかし、翻訳の世界に於ては、誰が言ったか「忠実であればある程醜く、不忠実であればある程醜い」⁴と冷笑を交えた箴言めいた文句が知られている。これは勿論、原文つまり起点言語を忠実に翻訳したらば、翻訳文つまり目標言語の美的感覚に往々相称わなくなり醜く感ぜられ、起点言語に不忠実に一と言って悪ければ、これを離脱し、目標言語の美的感覚に合せて翻訳された文章は、目標言語の話者にとり美しく感ぜられるとの謂いである。

されば、翻訳は、言語領域のみならず、複合的な技能の養成を必要とすることが分かっていうもので、殊に AI 時代に於ては、生成言語 AI の限界を超える領域をも課程の中心に据え、課程設計を考えるのが、必須になろうと筆者は、思料するのである。以上、翻訳を教える六ヶ敷さを述べてみた。随筆調になったきらいはあるが、教場に於いて翻訳を扱う際に留意せねばならない点がよく示されているのではないか。

授業に於る方法論と実践論

翻訳関連の科目に於て、教師を悩ませるのは教材の選択である。教材には二つの類型があり、一つは、読解教材のような、ただ原文と訳文が羅列されているだけの反復練習、一

つは、翻訳理論を実例を交えつつ論ずる理論書である。

但、我々がやらねばならないのは、日華・華日翻訳であるから、なるだけ該言語に関する教材を選択せねばならぬのは自明である。しかし、現実問題として日華・華日翻訳に関する教材は非常に少なく、更に現有教材の殆どが中華人民共和国に於いて編纂・上梓された教材であり、台湾の実情に合わない部分もある⁵。とは言え、教材がある以上、これを使わぬ手はなく、絶版が多いものの、何とか手に入れて参考書にしたり、或いは、運が良ければ学生全員に行き渡る分確保出来たりする。何とも心許ないが、これが現在の翻訳教材の現状である。

前述した原文・訳文対照式の旧態依然たる教材は、練習問題として教師が一部を抜萃してプリントにする使い方は良からうが、授業の指定教材としては、苦しかろう。というのも、この類の教材が取上げる例は、現今深層学習による翻訳機が得意とする分野で、ほぼほぼ同様に精確な翻訳が可能であるからである。実の所、この手の教材は、日華・華日に限ってもかなり古くからあり、管見では、明治時代の中頃から已に見られるものである⁶。

一方で、翻訳理論に軸を置いた教材は、翻訳研究に於て我よりも長い歴史を持つ欧米の翻訳理論を翻案する形で、換骨奪胎したものである。古典的翻訳理論たる A.F. Tytler “Essay on the Principles of Translation”を始め、J.C. Catford “Linguistic Theory of Translation: An Essay in Applied Linguistics”や E.A. Nida の “The Theory and Practice of Translation”等、優れた研究が知られる。我が短さを補う分には非常に有用であると思う。しかし、セオリーは時として甚だ晦渋且つ我方の言語事情に合わぬ場合も屢々なので、教師による補足解説と実例提示が必須である。

翻訳と復文

翻訳技巧の訓練法、或いは外国語の勉強法として、今や旧弊とも看做される方法に訳文・復文がある。原文を翻訳した後、更に訳文

3 下線は筆者による。

4 詳しくは鍋倉(1997)、頁 81-117、第五章「言語と文化的認識」を参照されたい。

5 例えば、技術や政治経済、文学関連の翻訳を志向していて、台湾で求められるようなサブカル系の翻訳に触れていない、文学では模範例に示される表現が台湾で使われる華語と乖離している等、致命的ではないものの、

なお瑾瑕を問われることにはなろう。

6 竹内大治『和漢獨英翻譯文例』竹内大治、明 25.3・徐東泰・井上孝之助『貿易叢談：東文翻譯北京官話』文尚堂、明 34.5・石山福治『支那語翻譯法講義』文求堂書店、大正 9 が明治・大正年間に刊行された日華翻訳教材である。

を原文の言語で再翻訳するものである。この方法の萌芽は古くは、文法訳読法による羅旬語・古典希臘語の学習の時代に遡り、東洋に於ても日本や朝鮮の漢文訓読及び訓下し文からの復文⁷は、今風に言えば、漢訳日・漢訳朝及びその復文である。

外国語教授法、翻訳学の研究が未熟であった時代—昭和の初期に至っても我が国ではこの方法で英独仏文の新聞の訳文と復文を繰り返して、これを習得する猛者がいたらしい。この様に書くと、邪道の様に思われるかも知れないが、語学学習法としては語学マニアの間では 21 世紀に至っても洪太く生き残っていて、昨年、田中健一先生が『はじめてでも「使える英語」が身につく！英語復文勉強法』なる教材を上梓し、復文を王道英語学習法とまで大言壮語—もとい豪語して居られる。

虚実は扱置き、翻訳の学習に於ても、訳文・復文は起点言語と目標言語の構造的差異を実感する際に役に立つ。実際の授業に於ては、斑分けした上で、学生等に伝言ゲームの要領で、訳文→復文→訳文→復文と翻訳の作業をして貰う。この時の肝は、参考にする訳文(復文)以外の訳文(復文)が学生に見えぬようにし、同じ学生が連続して訳文→復文を担当しないようにすることである。かくして、この作業が終了した時、訳文と原文或いは復文と原文が同一性を保つか否か。もし両言語の構造的差異に細心の注意を払いつつ訳せば、概ね似たり寄ったりの文になるはずである。筆者はこれを最初の授業でやって、学生にフィードバック(feedback, 意見還元)を与えている。目的は、日本語と華語に少なからず自信を持っている学生に翻訳の難しさを実感して貰いたいのが為である。

翻訳理論の学習

翻訳を授業として扱うからには、理論の学習をすべきである。換言すれば、方法論の学習である。只単に直訳と意識とで単純化してしまうのは余にも粗忽である。

日華翻訳のセオリーは、基本的に欧語の翻訳理論の焼き直しであるが、吾人の参考に資する所も少なからずある。例えば、原語の構造を一对一で生かしつつ目標言語に訳するのを「順訳」(直訳とは異なる)、「倒訳」は順序を変えて訳する法、特に日本語の連体修飾句が何聯にも連なってゆく場合、華語訳で

は主述構造に直して接続詞で繋ぎつつ訳することが多い。「分訳・合訳」は、文や句の区切りを変える訳法で、句読点単位での変換を指す。日本語の句点が華語の読点になる例が多い。「加訳」は、読んで字の如く言葉を加える訳法で、日華訳の例では、日本語の婉曲表現で言挿し以下を補う、日本語名詞文を華訳する際に動詞を補うのが多い。「簡訳(或いは減訳)」は、加訳の対立概念で、言葉を省略する訳法である。映像作品の字幕に多く見られる。変訳・反訳は、意識の一種とも取れる方法で、例えば文化に関する文脈を目標言語の文化に置換えて訳する、慣用句を目標言語の同位の表現で訳するといった例が挙げられる。反訳というのは、打消(否定)と言切(肯定)の形を反転させての翻訳を指し、暢達さを考慮してかような操作を行なうことがある。

極簡単にではあるが、授業で扱う翻訳理論に一斑を挙げた。反復練習型の従来型翻訳教材であっても教師が適宜例を採り、翻訳理論の教授と実践に用いることが出来る。

翻訳の為の文法理解

翻訳の適当を期する為には、日本語・華語の文法の知識が必須である。この事は授業に於ても強調すべきで、起点言語・目標言語総ての文法であって、起点言語のみの文法能力でないことにも留意せねばなるまい。台湾人学生に日本語華訳の演練と作業とを通じて能力と技巧とを培うと言うと奈何せん、日本語能力ばかりに注意が行きがちであるが、実際にはそう単純ではない。ここでは、筆者が授業で導入として取り上げる、日華の文法項目に就て述べておきたい。

日訳華に於ては、推量表現の翻訳が屢々問題になる。何となれば、日本語の推量表現は華語のそれより多様であり、また多用される傾向が見られる為である。ここに言う推量表現には、副詞を用いたものは含まない。

日本語の推量表現

- う/-よう 比較的客観的で確信性が高い推量。
- はずだ 話し手の主観的な確信からの推量。
- らしい 伝聞の「-そうだ」との違いは、話し手の主観が這入るかどうか。

⁷ 朝鮮語の漢文訓読は、ここでは、順読法ではなく釈読

法によるものを指す。

- そうだ 五感の判断から推し量る。
- みたいだ -ようだと共に比況とされる。
「-ようだ」より話し手の主観や直感が
滲み出た表現とされる。
- ようだ -みたいだと共に比況とされる
が、稍硬い表現で論説や報道にも用いる。
- まい 打消推量。「～なからう」「～な
いだろう」に相当する。
- に違いない 「絶対にそうだ」という話
者の十割の確信。
- かも知れない -に違いないとは対極的
に話者に確信がない推量。
- と思われる 個人的な思考、推量を言う
場合に用いる。

これらを翻訳する場合は、文法的な違いに
注意をすべきで、安易に「應該」「可能會」
「似乎/好像」と対応させて訳出すべきでは
ない。

日本語とは逆に華語には可不可を表す表
現が豊富である。會・能(夠)・可以・敢の様
に通常の副詞を用いて表現する方法の他に、
可能補語を用いてこれを表現する方法がある。

いつぞや Twitter(現:X)の纏めサイトに「日
本語の「食べられない」を中国語に訳すと、
シーンごとの語彙がすごい」⁸という纏めが
載り、「吃」と結びつく可能補語が実に多様
であることが話題になっていた。副詞「會・
能(夠)・可以・敢」を動詞の前に置く方法が
権威的ではあるが、会話文では、可能補語が
多用される傾向にある。

華語可能補語

- 得了/-不了 量が量、負担が負担なので
始められる/始められない。
- 得下/-不下 容量的に可能か否か。
- 得起/-不起 経済的な問題での可不可。
- 得到/-不到 物理的な問題での可不可。
- 得進(去)/-不進(去) 吸収するか否か、摂
取する慾があるか否か。
- 得好/-不好 巧みかどうかにか主眼が置か
れる表現。
- 得完/-不完 時間や量の問題で終えられ
る/終えられない。

- 得飽/-不飽 吃、喝、玩、睡、看、學等特
定の動詞と結び付いて、「心行くまで、
満足する」意味となる。

他にも「吃」とは結び付かない例として、
「-得懂/-不懂、-得住/-不住、-得掉/-不掉、-得
清楚/-不清楚、-得来/-不来、-得進去/-不進去、
-得過來/-不過來、-得開/-不開、-得下來/-不下
來、-得下去/-不下去、得上來/-不上來、-得上
去/-不上去、-得成/-不成」等等、枚挙に遑が
ない。

「翻訳者は、この程度であれば、颯と説明
出来る位の智識が必要だ」は過言になるうか。

ここで紹介したのは、翻訳に必要な文法知
識のほんの一部である。実際には、こうした
文法項目が多岐に互えることは衆人皆知の事
実であろう。

語彙—同字異義語・俗語・流行語・ 造語

語彙は、畢竟知識量の問題で、最終的には
知識が無ければ調べれば良からうと単純に
帰結するが、ここで問題にしたいのは、調べ
ずに誤訳してしまう例と、調べるのが難しい
例である。

同字異義は、同じ漢字を使いながら、義を
異にする語であり、漢字の弊を強調する立場
から日本語教育領域の研究でも取り上げら
れることがある。それは兎も角として、同字
異義語は、知らなければ気付きにくく、漢字
をそのまま援用する形で誤訳しがちである。
勉強や無理といった有名且つ基礎的な例は
兎も角として、柚子、暗算、鼎脰(鼎屬)、殺
風景、隔靴搔痒などは気を付けないとやっ
てしまいそうである。参考迄に挙げれば、こ
れ等はそれぞれ、香橙(羅漢橙)・心算・袒護
[偏袒]・(房間等)空蕩・事事不如意、感到很
焦慮と訳するべきで漢字に誘引せられては
ならぬのである。かかる例を総て学ぶのは現
实的ではないが、違和感を覚える感覚を養え
れば僥倖である。因みに、面白い例として、
工夫・饅頭がある。これは日華韓語で意味が
それぞれに違うのである。興味を唆られたら
ば、行き掛けの駄賃にお調べあれ。

俗語・流行語・造語・隠語の類は、厳密に
言えば、十把一絡げにするものではないが、
翻訳に於ては、これを分類する意義を感じな
い。狭義の方言も俗語に含めて考える。これ

⁸ <https://togetter.com/li/1815200> (2023.9.20 閲覧)

らの言葉は、インターネットに暗示を求める他に資源が乏しく、また多く文化・生活に根差している為、適切に翻訳するのが難しいことが多い。俗語・流行語は、変転の周期が短く数年で使われなくなっていくものが殆どである。そして、これらの語を華語の俗な表現でどう訳するかの問題もある。隠語は、『隠語大辞典』⁹なる奇書があるが、20年以上前の刊行であり、それ以後の隠語には当然追隨していない。

そして、訳者を悩ませるのが作者による造語である。西島伝法『宿借りの星』(2019)等はその典型と言えよう。頁毎に何個も造語が登場する様は壮観ですらある。但し、同書の造語は漢語系の詞が多いので、その意味では、「直訳」すれば良いわけだから日華翻訳の場合は、楽な部類かも知れない。

古典語の教養と文化・歴史に根差した表現

翻訳は、言語の翻訳のみならず、文化・情緒の翻訳でもあることは既に述べた。直訳では伝わり難い語感をどう伝えるか、これも翻訳の醍醐味であり難問でもある。また、本節では、加えて古典語の教養についても触れる。周知の通り、今日我々は口語体で話し、口語体で文章を書く。日本語関連学科の学生等が主に学習する日本語もこれである。しかし、実際の言語生活に於ては、表題としての厳めしさや文学的な効果を狙って擬古的な言い回しが用いられることがある。従って、文語の内でも現在でも比較的良く用いられるものは、教養として抑えておく必要がある。いつかさる文章に出たる「いざ行かん」を学生達に訳させてみた所、「欸、不知道。我不去了」の様に訳した者が多数居た。これは無理からぬ事で、口語しかやっていない学生に文語の助動詞「ん(む)」(推量・勧誘・意志・適当・婉曲)は無茶である。口語でも使われる打消しの助動詞「ず」の連体形「ぬ」が変化した形の「ん」と混同したのである。併も接続形も同じなので、知らないと気づけない。これは、華訳日の際の文言文にも同じ事が言える。一番の理想としては、文語の古めかしさを伝えるべく、華語側も文言文的に翻訳ではると尚良い。先の例は「今欲往前」とでもしたい所である。実例で、挙げるとすれば、映画『スターウォーズ』シリーズの台詞、旧訳では「フォースと共にあらんことを」だっ

たのが、新訳では「フォースと共にあれ」になっている。原語は同様に“May the force be with you.”なのだが¹⁰、難解だとされて変更したのかも知れぬ。他には、直接体験の過去を表す助動詞「き」及びその活用形、完了・存続の「り」及びその活用形、形容詞・形容動詞の文語活用、サ変動詞「す」及びその活用形、上下一段動詞の文語命令形、断定助動詞「なり」といった例が挙げられる。作品の表題のみを見ても

『ベニスに死す』(映画)

『生ける屍』(戯曲)

『ドラゴンクエスト IV—導かれし者たち』(テレビゲーム)

『華麗なる一族』(小説)

『半島を出よ』(小説)

『西部戦線異状なし』(翻訳小説)

『美しく青きドナウ』(音楽)

『吾輩は天皇なり—熊沢天皇事件』(新書)

の様に多数例があり、本文まで含めれば更に多数になろう。多くは、現代語の知識があれば類推可能であるが、前述したように誤り易いものもあるので、やはり基礎的な文語の知識は持っておいた方が良い。

次に文化に係る翻訳である。序論において、筆者は「裸玉で将棋を指す」「枕詞」という表現を用いた。「裸玉」は、将棋用語で、上手が玉將以外の駒を総て落とした状態での対局を指し、「枕詞」は和歌の技法で特定の語を導き出し語調を整え情緒を添える詞である。他には、相撲から「土がつく」、囲碁から「一目置く」、剣術から「鯉口を切る」といった表現を挙げておく。詳しい解説は紙幅の関係もあるので割愛する。ともあれ、こうした文化に根差した表現はそのまま直訳したのでは意味が通らないし、意識しても元の語感が伝わらぬことが多い。

終りに、歴史智識を前提とした表現に就いて一考する。例としては多くはないと思うが、日華翻訳に於いては、引っ掛かる部分なのである。適当に例を挙げてみよう。「埴輪みたいな顔」という表現がネット検索で探し出せる。これは、日本で普通教育を受けた者ならば、大方想像出来る。何の事はない、華語で言う「陶俑」である。しかし、この訳語から本意を想像することは困難である。言葉の意味自体よりも、歴史教科書に出て来たあのノッペリした虚ろな眼窩の埴輪の絵や

⁹ 木村義之・小出美河子編・皓星社、2000年。類書中最も専門的で語彙も充実している。

¹⁰ 因みに華語公式訳は「願原力與你同在」で文語的ではあるが、そこまでの難解さはない。

は写真が重要だからである。畢竟、「陶俑」よりもねその裏に在る「面無表情」の部分に重点が置かれる訳である。

手前味噌で恐縮だが、翻訳練習の為に筆者が作成した例文を挙げよう。中々の難文で、日本史を真面目に履修した学生とさらぬ学生でハッキリとした差が出る。

遂に学校裏の誰も知らない藪中の切通しから脱出した俺は、本能寺の変から辛くも逃れた織田信長の気分であった。「でかしたぞ！猿！」「誰が猿やねん(笑)」見事な日本晴れの空の下はじめて俺たちに笑みがこぼれた。

市川春樹—習作38

この文では、「本能寺の変」と「織田信長」と「猿」の関係が分っていないと訳されない。断言は出来かねるが日本人の教養としては、一般教養の範囲に這入るのではないかと思います。以下拙訳を参考に供する。

我們終於從學校後面被遺忘的小樹林中的小徑逃出來了。我心中所想肯定與成功臣下倒戈之中躲過一劫的諸侯一樣。「吾人臣下表現很好！」「誰是臣下啊(笑)」美麗天空，萬里無雲，我們此時才露出笑容。

作品への理解と共感

作品への理解と共感は、精確で美しい翻訳の為に意外に重要である。手厳しい批判を受ける誤訳は、訳者の作品に対する理解の不足から来る場合が多く、批判の主体は作品の熱烈な支持者であることが多い。原語を理解する語学力では、訳者の方が優れている場合が殆どであろう。しかして、作品に対する理解と共感の面では、ファン等には及ばず、結果非難囂々の惨憺たる有様になってしまうのである。

そこで、筆者の授業では、日本側は「カクヨム」「小説家になろう」「アルファポリス」台湾側は「巴哈姆特」「原創星球」と云った小説投稿サイトを用いて、作品の理解と共感を学習させるようにしている。書籍化されている有名作品を用いないのは、書評・抄訳の類がネットに氾濫して居り、安易にこれを参照してしまえば学習効果が上がらないこと、検索エンジン連動型の AI では、これを蒐集して理解や共感といった人間の感性に近い回答が導き出せるからである。また、商業出版に乗った作品に比べれば、表現や設定に関

して稚拙の批判を免れないが、それが却って翻訳の教材としては、丁度良い叩き台となる。前章で引用した戸田奈津子氏は、名訳も多いながら、誤訳の女王との不名誉な二つ名もお持ちだ。特に戦争モノ軍隊モノには、単語レベルの明らかな誤訳すら見られるそうである。

作品に共鳴するには、個人の境遇や嗜好と合致している必要があるが、業務としての翻訳ではそうも言って居られない。少なくとも作品に対して敬意と興味とを持って、単なる翻訳の対象ではなく、作品の一ファンになる位の心構えが欲しい。さらずは、定めて熱狂的ファンからの誹毀讒謔を免れ得まい。

結論

本論では、日華翻訳の授業に於ける理論、方法論、実践について述べた。従来の職人技的な翻訳術の訓練では、頓に飛躍の兆しを見せる AI 翻訳に太刀打ち出来なくなる。従って、言語の翻訳だけでなく、本文で述べたような様々な非言語的要素に焦点を当てる必要がある。AI の進歩により、言語の翻訳は効率的に行えるようにはなったが、文学や感情の深い理解、文化的な機微を捉える能力においては、人類の能力は、まだ AI の及ぶ所ではない。更に原文の美しさや感情の表現の正確な伝達が求められ、同時に目標言語の美的感覚に合わせる必要もある。翻訳は、言語の壁を超えて原文の魅力や感情を読者に伝える役割を果たすものであるから、今や業務次元で我々を蚕食しつつある AI 翻訳とは現時点では異なる価値を持つと言えよう。

翻訳の教育に於ては、学生に AI が苦手な部分や、人類の翻訳者にしか出来ない領域に焦点を当て、今後も存在感を保ち続ける必要がある。言い換えれば、人類の創造性と理解力を生かした領域への重心移動と言っても良い。

では、日華翻訳の授業において、翻訳能力向上に重要な点を述べた。学生がこれからの翻訳に於て身に付けるべき技能と言って然るべきか。従来のように翻訳の速度と達意に重点を置いた授業は、これからの AI 時代に於ては、無用の長物になると筆者は見ている。為、精確を期し文学性を持った翻訳を目指すわけである。翻訳理論に始まり文法理解、精確な翻訳を行うためには、日本語・華語の構造差・表現差を深く理解することが不可欠である。語彙に対する観察と注意、文語の基礎知識を備え、そして、作品への理解と共感

—作品の背景や登場人物の性格・感情を把握し、読者にもその魅力を伝えることが翻訳の品質向上に繋がる。

日華翻訳の授業に於て、これらの要点を組み合わせることは、学生が高品質な翻訳が行えるようにするための基盤を築く手助けになる。前述のような多岐に互る技能と知識とが結集して、優れた翻訳者を育てる道となるのである。翻訳者は異言語・異文化間の架け橋となり、情報を伝える重要な存在であることに変わりはない¹¹。

また、本論では、翻訳教授法に就ては論じなかった。何となれば、翻訳を教える方法は、読解・作文・文法・歴史地理・文化・文学といった科目の教授法を総合すれば良く、翻訳固有の教授法の如きは、恐らく寥々たるものだからである。敢て言えば、起点言語と目標言語両方の知識が必要とされる点だけが異なろうか。

更に、筆者の授業では、役割語、或いは役割語的に用いる方言をどう訳するかという問題も取り上げているが、本論では取上げなかった。特に台湾における日台サブカル(次文化)翻訳では重要であり、先行研究でも注目されて居るのであるが、セオリーとして成立しているとは言い難く、どうしても非体系的な個々の作品に出現する例の羅列に終始するしかないからである。学生の関心が高い主題であるから論じたいのは山々であるが、紙幅の関係、また筆者自身の不勉強も口実として次の機会に譲りたい。

参考文献

日文(年代順)

- エドワード・T・ホール著、佐藤信行・日高敏隆訳(1970)『かくれた次元』東京：みすず書房
- B.L.ウォーフ著、池上嘉彦訳(1993)『言語・思考・現実』東京：講談社
- E.サピア、B.L.ウォーフ他著、池上嘉彦訳(1995)『文化人類学と言語学』弘文堂
- 鍋倉健悦(1997)『異文化間コミュニケーション入門』東京：丸善出版
- 浅野享三(2018)「人口知能時代の外国語教育」『南山大学短期大学部紀要』終刊号、頁95-105、南山大学短期大学部

通訳翻訳ジャーナル編集部(2018)「翻訳・通訳の仕事はどうなる？ AI 時代に生き残る翻訳者・通訳者」『通訳翻訳ジャーナル』年4月号、頁3-48、東京：イカロス出版

瀧田寧・西島佑(2019)『機械翻訳と未来社会—言語の壁はなくなるのか』東京：社会評論社

전혜진(Чон Хе Джин)(2019)「AI 時代, 文學翻譯에서 機械翻譯과 人間翻譯 比較分析研究: 딸스또이의 『幼年時節』 翻譯 分析을 中心으로」『露語露文學』第31卷第1號、頁111-154、韓國露語露文學會

坂西 優・山田優(2020)『自動翻訳大全』東京：三オブックス

田中健一(2022)『はじめてでも「使える英語」が身につく！ 英語復文勉強法』ジャパンタイムズ出版

木村佐千子(2023)「AI 翻訳の外国語教育への影響を考える—獨協大学ドイツ語学科開設科目「テキスト研究(芸術・文化)」における AI 翻訳の活用例 —」『獨協大学ドイツ学研究』81、頁1-22、獨協大学学術研究会

外文(年代順)

- 羅興典(1955), 《簡明日漢翻譯教程》, 上海譯文出版社。
- Catford, J. C.(1965) *Linguistic Theory of Translation: An Essay in Applied Linguistics*. London: Oxford University, pp.73-82.
- Nida, E. A. (1969). *The Theory and Practice of Translation*. Shanghai: Shanghai Foreign Language Education Press.
- 今富正巳(1981), 《漢日對譯技巧》, 湖南科學技術出版社。
- 曹雲章、靳懷建(1983), 《現代日語翻譯技巧》, 海洋出版社。
- 著者不明(1986), 《漢語日譯常識》, 商務印書館。
- 著者不明(1987)《漢譯日基礎教程》, 北京大學出版社。
- 王佐良(1989), 《翻譯: 思考與試筆》, 外語教學與研究出版社。
- 蘇奇編(1993), 《漢日翻譯教程》, 大新書局。
- 譚載喜編譯(1999), 《新編奈達論翻譯》, 中國對外翻譯出版公司。
- 靖立青(2001), 《日漢翻譯技巧》, 鴻儒堂。
- 謝良宋(2001), 《中文日譯技巧》, 尚昂。

¹¹ 「AI 時代でも揺るがない翻訳者の存在意義。パリで日仏翻訳文学賞授賞式開催」, Yahoo ニュース, 2023.9.15 <https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/bb037785cc7d39432>

[85d7ab7640cc4839f59a853](https://doi.org/10.21203/rs.3.rs-2854741/v1) (2023.9.20 閲覧)も参照のこと。

- 高寧(2002)，《中日互譯捷徑》，鴻儒堂。
- 常波濤主編(2003)，《日漢互譯基礎與技巧》，大連理工大學出版社。
- 高寧(2008)，《日漢翻譯教程》，上海外語教育出版社。
- 李家璿(2010)，〈全自動機器翻譯加後編輯與人工翻譯之比較〉，國立臺灣師範大學翻譯研究所碩士論文。
- 尚昂文化編輯部(2012)，《中譯日手冊》，尚昂。
- 龐春蘭(2013)，《新編日漢翻譯教程》，北京大學出版社。
- 李明、盧紅梅(2014)，《語言與翻譯(Language and Translation)》，書林出版有限公司。
- 劉靜娜(2020)，《簡明日漢翻譯教程》，中國宇航出版社。
- 崔學森、朱俊華(2021)，《日漢翻譯實踐教程》，北京大學出版社。
- 陳欣怡(2022)，〈人工翻譯與機器翻譯比較—以《動物農莊》為例〉，輔仁大學跨文化研究所翻譯學碩士論文。

作者簡歷

姓 名：市川春樹/ Ichikawa Haruki

現 職：東吳大學日本語文學系兼任助理教授

學 歷：國立臺灣師範大學臺灣語文學系博士

經 歷：國立臺灣師範大學臺灣語文學系兼任助理教授
桃園市樂活領航教育學會講師
中國科技大學通識教育中心講師

研究專長：日語史、日語學史、日本古典文學、日本漢文學、日治時期閩客、日韓語教材研究

研究著作：

- 〈漢字の字体・書体に関する諸問題--漢字施策による標準字形の定義とその電算処理を巡って〉，《東吳日語教育學報》55 卷，頁 84-113，2022.3
- 〈東洋協會專門學校之臺灣語教育研究—以柯秋潔（1872-1945）教授法及其教學活動為討論核心〉，《靜宜中文學報》6 期，頁 29-62，2014.12
- 〈日治最初期台灣福佬話教材編纂之相關考察：
日本人對台灣福佬話的認知與概念〉，《台灣學誌》第八期，頁 29-58，2013.10